

## 論文題目： 文学作品の翻訳基準へのアプローチ

－芥川龍之介の短編作品「鼻」の中訳を対象に－

提出機関：杏林大学大学院国際協力研究科博士前期課程

提出者：劉芳

提出年月日：2011年1月12日

取得学位：修士(言語コミュニケーション学)

## 要旨

本修士論文では文学作品を翻訳する際、広範で共通な翻訳基準を問題として取り上げ、その上で筆者から見た文学作品における共通な翻訳基準の二原則を提起した。強調した必要な二原則は下記の通りである。

- I. 原著者の真の意図をできる限り正確に理解し伝える。
- II. 目標テキストで原作品を文学的に再創作する。

過去の翻訳学の発展史を辿りながら、言語学と文学を通して文学作品の翻訳基準へアプローチを試みた。

最初に、翻訳学における発展の背景とこれまでの言語学との関係を概観した。第1章では過去の翻訳学発展史における「直訳と意識」問題を回顧した。続く第2章では翻訳学と密接な関係が存在する言語学との関連を論じた。言語学から翻訳学の基本の姿を確認し、言語の各特徴による翻訳学への示唆を求めた。さらに言語と意識との関係、言語の概念と心像に一致する翻訳の処理方法、言語の比喩と多義性からみる翻訳の処理手法、起点言語としての日本語について論じた。

第3章では、中国における過去の翻訳原則・法則を整理した。特に魯迅の「硬訳」(翻訳調)と傅雷の“重神似不重形似”(形の相似を重んじるより精神の相似を重視すること)を取り上げた。特に、傅雷の翻訳法則は、この翻訳二原則の大きな根拠となる。

第4章では芥川龍之介の短編作品「鼻」を考察例にした理由を述べた。続いて第5章で、魯迅の近代中国語訳と台湾の現代中国語訳を比較分析しており、「鼻」翻訳実践を試みた。魯迅は20世紀の初期に芥川龍之介及び他の日本の有名な作家の作品を翻訳して、中国の読者に日本の文学作品を紹介している。魯迅の翻訳は現代中国語から評価すると、ぎこちないところが相当あるのではないかと考える。勿論、魯迅は作家なので、センスの光る翻訳文もある。このように考察する過程で、二つの翻訳の問題点と文学性の豊かな内容を見つけながら、翻訳プロセスの分析を通して、検証すべき点を明らかにできたと思う。

---

Liu Fang, "An approach to norm of translation of literature – An examination of Chinese translation of a short story 'The Nose' by Ryunosuke Akutagawa - ," *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 201-202. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

第6章では、筆者の翻訳プロセスと検証結果をまとめた。さらに二つの翻訳における翻訳の問題点とそれぞれ優れている点を取り上げ、具体的な翻訳の対処法について考察した。

.....

**【著者紹介】** 劉芳(Liu Fang)、中国大連外国語大学日本語学科卒業、日本のIT企業に3年間勤務。2009年4月杏林大学大学院国際協力研究科・国際言語コミュニケーション専攻博士前期課程入学、2011年3月、博士前期課程修了。現在、首都大学東京人文科学研究科博士後期課程在学中。